

特集 へ運動会へ

運動会と保育学的想像力

太田 光洋

運動会と保育者に求められる想像力

五年ほど前、北海道に住んでいた頃、運動会の観客について調査をしたことがある。¹⁾その結果によれば、一家族あたりの平均観客数は、幼稚園・保育所とも五人を少し超える数であった。もう少し詳しくみると、幼稚園では五人という家庭が最も多く、保育所では三人という家庭が多かった。なかには十五

人という家庭もあり、幼稚園の園庭では観客があふれるのもうなずける結果であった。平均して園児数の五倍の観客がくるとなると、これは大変な行事で、おそらく幼稚園・保育所のもつとも大きい行事といつていいだろう。

考えてみると、運動会は不思議な行事である。この行事に対してもほんとうにいろいろな意見がある。昭和五十年代末頃から幼稚園教育要領・保育所

保育指針の改訂が検討され始め、保育の見直しにと
もなつて行事についてもいろいろな議論があつた。しか
会の内容や方法にもいろいろな意見があつた。しか
し、結論はいまもつてはつきりしないまま、それぞ
れの園でいくらかの工夫がなされ、現在に至つてい
る。

競争の是非が問われたり、運動会そのものの不要
論が出るなどして、順位をつけることや競争的な種
目をやめる園も現れ、なかには運動的そのものを廢
止する園さえあつた。けれども、運動会という行事に
ついて考えれば考えるほど、こうしたやり方は想像
力に欠けるのではないかと思つてゐる。それは理屈
のうえでは正しいかもしれないが、みんな満足でき
ないのだ。運動会は、いろいろ人の思いや期待が
込められているから、その位置づけや取り組み方が
難しいのだろうが、子どもが育つ環境と合わせて、
その思いや期待に馳せる想像力が保育者には求めら
れる

運動会と子どもの事実

れているのではないだろうか。

保育者にはどんな想像力が求められているのか。
多くの園が、運動会を見直す過程で、これまでの
運動会での子どもの姿を振り返つてゐると思う。か
つて保育者だつた筆者にもこんな思いがある。

引き締まつた真剣な顔。力を合わせて走る子ども
たちの姿。バトンをつなぎ、まっすぐ前を見つ
めて走る子どもたちの姿を見ていると、なぜかわ
からないが涙が出てくる。自分が保育者だつた
頃、運動会の度に同じ気持ちになつた。

保育者だつたから……そう思つていたが、大学
に勤めるようになつても、あるいは親として参加
した幼稚園や保育所、小学校の運動会を見ても
やっぱり同じなのだと氣づいた。子ども

もたちの一生懸命な姿を見て感動する。どの親も同じだろうと思う。

多くの場合、集中的、意識的に行われる運動会の取り組みを通して、子どもたちは成長し、その姿に触れて親や家族は感動する。子どもたちはそれを受け止めてどこか誇らしげで、自信をつけていく。そ

ういう手応えを保育者は感じてきている。その確信に保育者は自信をもってほしい。

運動会に懐疑的になる保育者だつているのも事実。観客が多いので、「見せる」ことがエスカレートすると無理しなければならず、それが嫌だと感じる保育者も少なくない。

近づくと、多くの園ではその練習にかなりの時間を費やす。ならば方から行進、体操、かけっこ、団体種目、親子競技などの競技や演技。なかにはマーチングまで取り入れるところもある。子どもだけでなく、保育者だつてうんざりすることがある。

保育者、あるいは幼稚園や保育所がカッコつけすぎだと思うことがある。「うちに入れれば子どもはこんなに立派に育ちますよ」と。こうすることが、子どもの事実を隠していないか。ほんとうは大切にしなければならない子どもの遊びや生活を壊していくのか。保育の原点に立ち返つて、保育者に考えてほしい。

「運動会の練習ばっかりでおもしろくないから幼稚園に行かない」という親からの電話。運動会が

「見せる」とことと関係があるが、観客について。冒頭にも書いたとおり、なかには十五人の大応援団

を擁して運動会に乗り込む家族だつてある。北海道にいた頃、へき地保育所や季節保育所に行くと、十五、六人の子どもたちの遊ぶ姿を見るまわりのおとなのはなざしの優しさを感じた。子どもたちは地域の宝物なんだ、と。

およそ教育的でないといわれるかもしれないが、運動会ではお母さんはもちろん、お父さん、きょうだい、おばあちゃんにおじいちゃん、それに近所の人までやつてきて、子どもの姿に目を向け、自分たちも参加して、お祭り気分。筆者の経験でいえば、お昼にはお弁当を広げ、ビールまで持ち込んで、楽しい時を過ごすという地域も少なくない。子どもたちの行事はいまでも、地域の「祭り」であり、家族の「祭り」である。

運動会は地域社会に欠かせない行事として定着してきたものである。²⁾昭和三十年代に幼稚園の園庭整備が急速に進むにつれ、それまで小学校への招待や

同時開催が多かつた幼稚園の運動会は独自に行われるようになった。

〈保育学的想像力〉による

子どもを中心に据えた運動会を

こうした事実を受け止めながら、保育者は運動会を構想する必要があり、それを子どもを中心に考えることこそ「保育学的想像力」といえると思う。子どもを取り巻く人々の思いを含め、子どもの生活まるごとを引き受け、保育を構想することである。

遊びについての従来の知見から

いえは、運動会の競技のようなゲームは、発達的には幼児期のごっこ遊びに続いて楽しめるようになる遊びであり、幼児にとつて簡単ではない。でも、運動会の取り組みを通して子どもが育つとい



う実感をもつてゐるのなら、その実践から子どもに適切なかたちを探すのが保育者の仕事ではないか。そういう子どもが教えてくれているのではないか。だとすれば、幼児期の子どもの遊びゴコロにかなつた種

目も、競争的な種目もあつていい。

そうした中で、子どもの姿を親や地域の人々に伝え、その未熟さも、かわいさも、これから育てていかなければならないことも知つてもらうことが必要であろう。保育者が、子どもの事実を覆い隠してしまつてはいなか。保育ではよく見る子どもの姿だと思うが、筆者の長男にも次のようなことがあつた。

こうした子どもの姿を、ありのまま受け止めてくれる保育が必要ではないか。こういう子もいる、そしてそれでいいのだということを伝えることが、子育てを樂にする。子どもの事実を伝えることが、地域の皆で子どもを育てていく土壌を育むのではないかと思う。

そして、地域の人々。地域の教育力の再生が叫ばれ、さまざま試みがなされているが、子どもが暮らす幼稚園や保育所が地域に開かれ、解体しつつある地域を結び直すことはできないか。これからの保育は、幼稚園や保育所が閉じていては不可能である。幼稚園や保育所が子どもを中心据えながら、地域に発信し、地域をつなぐ存在になることが求め

だけが体操をしないことはあまり気にならなかつたが、その間彼がどんな気持ちでいるのかは気になつたものだつた。

特集 〈運動会〉 ~~~~~

られる。運動会はそれを考へ、実践するもつとも適した行事ではないだろうか。

運動会は難しい。が、運動会が抱える課題や難しさはけつして矛盾するものではないと思う。子どもの事実、実践の積み重ね、保育の歴史、幼稚園や保育所の役割といったことを考え合わせる「保育学的想像力」をもつてすれば、新しい運動会のかたちを構想できると信じている。それが実践を通して考え、新たな実践をつくっていく保育者の保育者たる専門性なのではないか。

(九州女子大学)

注

- 1) 太田光洋・金田正一・相澤伸幸ほか「幼稚園と保育所における運動会の観察調査」旭川大学女子短期大学部紀要30、19-32、二〇〇一
- 2) わが国の運動会は、その原型といわれる海軍兵学校で開催された「競闘遊技会」（一八七四年）にはじまり、兵

式体操の学校教育への導入（一八八五年）、初等教育における体操の必修化（一九〇〇年）などと並行して、日露戦争後の地方改良運動と連動するかたちで地域社会に欠かせないものとなっていた。小学校の運動会に招待され参加していた幼稚園も大正期から独自で行う園が始め、昭和三十年代には園庭が急速に整備され、多くの幼稚園で独自の行事として行われようになつた。ただし、内容は小学校で行われていた「競技会的」なものであつた。

参考文献

- 前橋明・馬場桂一郎『楽しい子ども運動会』大学教育出版、一九九二
- 中川洋一「運動会の定着」『北海道教育』144、一九九九
- 吉見俊介ほか『運動会と日本近代』青弓社、一九九九